

平成22年3月31日現在

研究種目：基盤研究(B)  
研究期間：2007年度～2010年度  
課題番号：19401028  
研究課題名(和文)  
故宮博物院に収蔵される甲骨文の来源踏査—未刊本『甲骨刻辞』の解読を通して—  
研究課題名(英文)  
Wandering investigation research of Continual change of shell bone splinter stored to  
The Imperial City.  
- Through the decipherment of the unpublished book 'koukotu kokuji' -  
研究代表者  
東 賢司 (HIGASHI KENJI)  
愛媛大学・教育学部・准教授  
研究者番号：10264318

研究代表者の専門分野：中国出土資料

科研費の分科・細目：東洋史

キーワード：甲骨文,唐蘭,甲骨刻辞,故宮博物院,拓本,馬衡

### 1. 研究計画の概要

訪中した時の資料収集の過程で、未見の甲骨片拓本約300件を発見し、日本に持ち帰ることができた。

この資料は3冊に分かれているが、中巻に書名と編者の記述があり、それぞれ『甲骨刻辞』、『鄧鼎馬衡 秀水唐蘭 類』とある。この拓本集は、上記の二名が関わっている資料であることが署名から確認できるのであるが、馬衡が保管していた甲骨の拓本をとり、出版しようとしていた資料である疑いが高い。ただし、拓本集の書名である『甲骨刻辞』という著書は、現在でも出版されていない。この甲骨片は、北京の故宮博物院あるいは、馬衡が考古学を始めることになった北京大学に収蔵されていると想像される。故宮博物院や北京大学所蔵の甲骨資料と拓本資料を比較し、所在を確認して、来歴等を明らかにする。

### 2. 研究の進捗状況

故宮博物院長としての肩書きが有名であるが、『中国金石学概要』『凡将齊金石叢稿』等を著し、主として石文の研究において名を残した研究者である。

1922年2月(40歳)には北京大学国学門に考古学研究室が設けられ、主任となった。羅振玉などの古代文字研究者を招聘することにより、北京大学での古代文字研究が一気に加速する。後述の『甲骨刻辞』には、羅振玉が編集した著作の番号が残されることが多いが、馬衡と羅振玉にはこの時点から接点が

あった。

馬衡が故宮と関わりを持つようになったのは、1924年11月(43歳)のことである。当時の内閣が「協理清室前後委員会」を組織させ、皇室の公財・私財の一切を管理させた。

一方の唐蘭は、1923年に無錫国学専修館を卒業し、王国維の弟子となって、甲骨・金文などの古文字を研究するようになった。

馬衡は1948年(民国37年)から1951年(中共3年)まで、毎日毛筆で日記を付けている。日記は、私的な要素が強いものであり、馬衡の感情を深く読み取ることができる貴重な文献である。その「馬衡日記」には、唐蘭のことが33日に渡って記録されている。その多くは唐蘭という本名による記述ではなく、「立庵」という号による記述であることが興味深い。

馬衡が甲骨文字を収集できるようになったのは、北京大学に勤務してからの時期である。編集は、北京大学に考古学研究室が設けられた1922年以降、馬衡が北京大学を辞職するまでの1932年までの10年ほどの可能性が高い。後世、1922年までは甲骨文研究は初期の段階にあると指摘される。『甲骨刻辞』については、①原骨の収蔵場所は、北京大学にあると思われる。②作製時期について、『甲骨文合集』による分類では、I期とV期のものが多数を占める。③拓本の所蔵者について、羅振玉・商承祚・社会科学院歴史研究所・南京師範学院の収蔵品が目立っている。北京大学で収集された甲骨片が、北京大学に関連のある古代文字学者によって先を争うように公にされていたことが想像できる。

権利者：愛媛大学

種類：特許

番号：2010-16745

出願年月日：平成 22 年 1 月 28 日

国内外の別：国内

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している  
(理由)

平成 19 年度、20 年度の調査研究については、『甲骨刻辞』を分析し、故宮博物院や北京大学の収蔵品の調査を順調に行うことができた。平成 21 年の調査については、北京の新型インフルエンザ流行の関連で少し停滞しているが、既刊の甲骨文献との比較も順調である。380 片中 145 片(38%)の旧著録集録を確認することができた。馬衡や唐蘭の関連についての新事実も明らかにできた。

### 4. 今後の研究の推進方策

(1)『甲骨刻辞』と既刊本の比較の促進

拓片中の 235 片について、既刊本との比較を進める。『甲骨刻辞』は、甲骨片の専著としては早期に発行されたものであり『甲骨文合集』に記録されている。しかし、これに集録されていないものが、この中には含まれている可能性が高く、「未著録片」であるのか「マイナーな図書に収録されている片」であるのかを確定する必要がある。

(2) 馬衡所蔵文物の行方

馬衡の収集資料は、古代文物から近現代に及ぶが、馬衡自身の交流の広さにも影響している。馬衡は故宮博物院の館長を務めただけでなく、篆刻家の総本山というべき「西泠印社」の社長にも就任していた。考古・芸術・政治分野と幅広い人脈が、馬衡の強みであるが、人間関係を紐解くことは時間がかかる。

時間が限られているために、馬衡の発掘・収集・保管などをしてきた古代文物中、故宮や北京大学関連資料の現所在地を探る。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

① 東賢司「馬衡・唐蘭編 未刊本『甲骨刻辞』調査記録」、『愛媛大学教育学部紀要』、査読無、第56 巻1 号、2009 年、291-299 頁

〔学会発表〕(計 1 件)

① 東賢司、「故宮博物院の収蔵される甲骨片流転の遍歴調査研究」、2009 年、平成 21 年度高梨学術奨励基金研究発表会、平成 21 年 6 月 17 日、丸仁ホールディングス

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 1 件)

①

名称：筆記具

発明者：東賢司、水口浩彰